音楽科との関連を図る道徳科授業の構築

―道徳的価値内容「感動、畏敬の念」を育む―

石黒　真愁子

【要旨】

古来、音楽は道徳と深く結びつき尊重されてきた。今日的学校教育においても道徳と音楽との関連を図ることによって、より深く自己を見つめ、「学ぶ意義」を実感し、主体的に意欲をもって学習に取り組む姿勢を培うことができるものと考える。音楽科の目標は、「豊かな情操を培う」ことである。音楽によって養われる情操は美的情操であり、美しさを受容し求める心は、美だけに限らず、より善なるものや崇高なるものに対する心にも通じるものである。そこで、道徳と音楽との関連を図り、音楽科で扱った内容や教材の中で適切なものを道徳科に活用することで、道徳的価値の自覚を促し、児童生徒がその学ぶ意義を実感できるものと考える。授業では、合唱曲「旅立ちの日に」と『礼記』「楽記」の一文をもとにDの視点の内容項目「D 感動、畏敬の念」の教材を開発し、授業実践を行った。音楽を活用したことにより、児童の道徳的価値への深まりを捉えることができた実践である。

キーワード：
学ぶ意義の実感、感動、畏敬の念　音楽の教化性、豊かな情操、道徳と音楽との関連

1　問題の所在と目的

音楽は、人間形成に大きな影響を与える。「音楽は人の生命を支える強いものをもっている」これは、西洋音楽史を研究する皆川達夫の言葉である。[1]人は、美しい自然や素晴らしい芸術作品、崇高な生き方に触れた時、魂が震えるほどの感動を覚える。そして、その体験は、よりよく生きようとする意欲を生むものであるということである。かつて孔子は、『礼記』楽記篇において、「徳は性の端なり、楽は徳の華なり」（人間の美徳は本性の端緒であり、この徳の美しい発現が音楽である）と、音楽が人格の完成を表すものであるとしている。[2] 現代に目を転じると、『小学校学習指導要領解説　音楽編』には、「音楽を愛好する心情や音楽に対する感性は、美しいものや崇高なものを尊重する心にもつながるものであること。また、音楽科の学習指導を通して培われる豊かな情操は、道徳性の基盤を養うものである」ことが示されている。[3]このことから特に音楽教育は、道徳教育の内容項目Dの視点「主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関する」との関わりが極めて深いと考えることができる。Dの視点の道徳的価値は、心情に依拠しながらも明白な観念や意識が統一されて、持続的に起こる高次な精神作用に支えられた人間形成において重要な価値観の基礎となるものである。

しかし、このような内容項目Dの視点における道徳科の授業は、児童生徒の限られた体験や実生活から遊離した内容が多いため、教師の苦手意識は強く、また教師自身も、内容項目Dの視点における道徳的価値のとらえが曖昧な場合が多いのが実態である。諸富祥彦は著書『人間

を超えたものへの畏敬の念の道徳の授業』の中で「畏敬の念があってこそ、ほかのあらゆる道徳的価値がその価値としての重みを取り戻すことができる」と「畏敬の念」を重要な価値としてとらえている。そして、この超越的な価値の道徳科の授業における指導には、①各児童生徒の圧倒的な体験を振り返らせ、言語化させ、他者と分かち合わせる②イメージを活用する③畏敬の念の体験の受動性から受身形の発問を活用する④圧倒的な迫力と魅力を備えた資料の活用が必要であることをあげている。[4]道徳科の授業において、児童生徒が教材を読んだ時、内発的に感動や畏敬の念が沸き上がってくるような教材を選定、あるいは開発することが重要である。しかし、感情の主体は児童生徒であり、誰もがその教材から感動を覚えることを求めるのは難しい。感動、畏敬の念の内容項目について『学習指導要領』では、「体験活動等における、自然の織りなす美しい風景や優れた芸術作品等の美しいものとの出会いを振り返り、そこでの感動や畏怖の念、不思議に思ったことなどの体験を生かして、人間と自然、あるいは美しいものとの関わりを多面的・多角的に捉えさせることが大切である」としている。[5]

では、Dの視点における道徳科の授業の難しさをどのように乗り越えていったらよいであろうか。道徳科の授業では、ひとつの切り口として、音楽が人間に働きかける効果や、それにより引き起こされる感動体験に着目し、道徳と音楽との関連を図ることが考えられる。自然への畏敬や崇高な生き方への体験が希薄な児童生徒も、生活の中で音楽に励まされたり、癒されたりした体験は少なからずある。そのため音楽による感動体験は想起しやすいと考える。また、対象となるものの価値に触発され、あふれ出る感情が沸き上ってくる人間の感動体験を、自己の道徳的課題として深くとらえるためのアプローチとして、問題解決的な道徳学習もひとつの切り口になるのではないだろうか。一般に感動や畏敬の念の指導には、モラル・ジレンマ資料等の活用はなじまないとされる。しかし、道徳的価値を追求する主人公の葛藤に自己を投影することを通して、感動や畏敬の念という道徳的価値の意義を見つめ直す機会を得ることができるのではないだろうか。感動は人生を豊かなものに彩り、畏敬の念はよりよく生きる喜びを支えるものである。道徳科において感動や畏敬の念の意義を深く考えることは豊かな生き方を創造するとともに、音楽科においては、主体的・協働的・創造的に音楽学習に取り組む姿勢を培い、感動体験を通してあらためてその意義を実感するという、相乗的なスパイラルを生むものであると考える。

２　豊かな情操と道徳心

教育基本法第２条（教育の目標）第１号において、「幅広い教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。」と教育の目的として「豊かな情操と道徳心を培う」が規定されている。これを受け、『学習指導要領解説　総則編』の第１章第１の２の（２）１段目「豊かな心や創造性の涵養」において、「道徳教育や体験活動、多様な表現や鑑賞の活動を通して、豊かな心や創造性の涵養を目指した教育の充実に努めること。」と示されている。[6]

さらに、『中学校学習指導要領解説　音楽編』では、「豊かな情操を培うことは、一人一人の豊かな心を育てるという重要な意味をもっている。美的情操とは、例えば、音楽を聴いてこれを美しいと感じ、更に美しさを求めようとする柔らかな感性によって育てられる豊かな心のことである。このような美しさを受容し求める心は、美だけに限らずより善なるものや崇高なる

ものに対する心、すなわち、他の価値に対しても通じるものである。したがって、教科の目標では美的情操を培うことを中心にはするものの、学びに向かう力、人間性等の涵養を目指すことを踏まえ、ここでは、豊かな情操を培うことを示している」と、音楽科教育は美的情操を培うことを通して、豊かな情操を育み、豊かな心をもつ人間の育成を目指していることを示している。[7]広辞苑では情操（Sentiment）を「感情のうち、道徳的・芸術的・宗教的など文化的・社会的価値を具えた複雑で高次なもの」ととらえている。情操は、身体的変化を伴わず、欲求などには関係なく持続的に起こる感情で、価値観の基盤をなすものである。このことからも音楽科が目指す美的情操による豊かな情操には、よりよい人格の完成を目指して育成すべき多様な要因が内包されていることがわかる。

また、「感性」とは、価値あるものに気付く感覚ととらえることができる。この「感性」から生まれるのが豊かな情操であり、それは価値を求め続ける態度や感情である。音楽教育に造詣の深い供田武嘉津は、「おそらく真の徳育というものは、審美の糸ぐちをたどりいくことによって感得し体験しうる、審美の心情によって初めて育成されうるものではなかろうか。このようなことから考えて、音楽などによる審美的な感覚の陶冶こそが道徳教育への真の基盤だと思われる」と、道徳教育と音楽教育との関連について言及している。[8]美的情操は柔らかな感性により培われる豊かな心である。この受動的な感性に対して、理性は概念的な思考をあらわすが、受動した対象となる価値をさらに、創造的に表現していく点にも音楽活動の意義は大きいと考える。さらに、このような美しさを受容し求める心は、美だけに限らず、より善なるものや崇高なるものに対する心、すなわち他の価値に対しても通じるものであると考える。

３　道徳教育と関連する音楽科の特質

音楽科における道徳教育は、教科固有の目標に基づき特質を踏まえながら指導が展開される。学習内容や教材そのものに道徳的価値が内在するものがあり、また、指導を充実させる過程で道徳性が養われる学習活動もある。教師はこのような道徳教育との関わりの視点を十分に意識し、指導することが重要である。『小学校学習指導要領解説　音楽編』では、「第１章総則の第１の２の（２）に示す道徳教育の目標に基づき、道徳科などとの関連を考慮しながら、第３章特別の教科道徳の第２に示す内容について、音楽科の特質に応じて適切な指導をすること。」と示されている。[9]さらに、音楽科における道徳教育の指導においては、学習活動や学習態度への配慮、教師の態度や行動による感化に加え、両者の関連を、

① 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を養う。
② 音楽を愛好する心情や音楽に対する感性は、美しいものや崇高なものを尊重する心につながるものである。また、音楽科の学習指導を通して培われる豊かな情操は、道徳性の基盤を養うものである。
③ 音楽科で取り扱う共通教材は、我が国の伝統や文化、自然や四季の美しさや、夢や希望をもって生きることの大切さなどを含んでおり、道徳的心情の育成に資するものである。ことが明記されている。[10]

こうした音楽活動の一つである合唱の楽曲にはメッセージ性の強いものも数多くあり、歌詞に込められた思いや願い、楽曲の背景を捉えることは道徳性の育成と深く関わっている。合唱

は一人では実現できないものである。他者と関わる中で創り上げていくものである。文化祭や卒業式歌などにおいて歌われる合唱曲は、他者と共に歌い上げる音楽ならではの価値ある役割を果たしていることに着目したい。生徒は「楽曲との関わり」「他者との関わり」から多くを学び、豊かな人間性を育んでいくものである。仲間と共に歌い、合奏する音楽活動を通して魂が鼓動する感動体験は、生きていることを実感する貴重な体験である。そしてその生きているという自覚を、生かされていることへの自覚と感謝へと転じるためには、美的情操だけにとどまらず、より善なるもの、崇高なものを求める情操との関わりでとらえることが重要であり、心で感得されることで覚醒されていくものである。

以上、音楽科の指導にあたって教師は、固有の目標に向かいながら、道徳的側面をしっかりと捉えて指導にあたることにより、楽曲に対する深まりや広がりが生まれてくる。そしてそれは、より主体的・協働的に楽曲と関わり、さらによりよい表現をしようとする意欲を向上させる導火線となる。このように、美しいものを美しいと感じ、さらなる美しさを求める豊かな情操は、より善なるものを求め、よりよく生きようとする生き方を培うことから、道徳教育におけるＤの視点「主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関する」との関連が深くとらえられる。学校の教育活動全体を通して行われる道徳教育とその要となる道徳科、そして学校行事とも関わりが深く、豊かな情操や道徳性を養っていく音楽科との関連を図る指導を展開することで、相互に効果を高め合うことが期待される。

４　道徳教育と音楽科との関連を図った授業実践　「Ｄ　感動、畏敬の念」

さて、次に、このような道徳教育と音楽教育との関連を図った授業実践について考えてみよう。1989（平成元）年の『学習指導要領』において、道徳教育の内容は４つの視点に整理された。その中の一つがＤの視点であり、現在では、「生命の尊さ」「自然愛護」「感動、畏敬の念」「よりよく生きる喜び」の内容項目により整理されている。その中の一つ、「感動、畏敬の念」について、『小学校学習指導要領　解説　特別の教科　道徳編』高学年では、「人間のもつ心の崇高さや偉大さに感動したり、真理を求める姿や自分の可能性に無心で挑戦する人間の姿に心を打たれたり、芸術作品に秘められた人間の業をこえるものに気付いたり、大自然の摂理に感動し、それを包み込む大いなるものに気付いたりすることを通して、それらに畏敬の念をもつことが求められる。指導にあたっては、文学作品、絵画や造形作品などの美術、壮大な音楽など美しいものとの関わりを通じて、感動したり尊敬や畏敬の念を深めたりすることで、人間としての在り方をより深いところから見つめ直すことができるようにすることが大切である」と示されている。[11]

また、『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　音楽編』には、「音楽科で扱った内容や教材の中で適切なものを、道徳科に活用することが効果的な場合もある。また、道徳科で取り上げたことに関係ある内容や教材を音楽科で扱う場合には、道徳科における指導の成果を生かすように工夫することも考えられる。」とし、道徳教育の目標に基づき、道徳科との関連を考慮しながら音楽科の特質に応じて適切な指導をすることが求められている。[12]そこで、Ｄの内容項目と関連させた自作読み物教材を開発し、音楽を活用した授業展開を考察した。以下、授業において使用した開発教材である。

（1）自作読み物教材「旅立の日に」

旅立の日に

春の到来を思わせる柔らかな日差しが窓から差し込み、温かな風にのって、教室のあちらこちらから歌声が廊下に響き渡っていく。ぼくたち６年生にとって、小学校生活最後をしめくくる卒業式が近づいてきた。どのクラスでも、もう式歌『旅立の日に』の練習が始まっている。しかし、ぼくたちのクラスはまだなんとなくギクシャクとした雰囲気だった。というのも、クラスの中でパートの分担が原因で対立が始まっていたからだ。きっかけは明君が「卒業式で歌う『旅立の日に』ではどうしても主旋律を歌いたい」と言い出したことに始まる。
「みんなあの『旅立の日に』って曲、かっこいいよね。あーあ、旋律を思いっきり歌って気持ちよく卒業したいな」と、大声で叫んだ。
教室が一瞬しーん、と静まり返った。その発言にみんなが息をのんだ。しばらくして、何人かの男の子が、
「そんなの誰だってそう思ってるよ。自分だけ好きなパートを選ぶのはずるいよ」
と、声をあらげた。ざわざわとした教室の中にパラパラと拍手がわきおこった。明君はぷいっと顔をそむけそのまま教室から出て行ってしまった。その日、ぼくたちのクラスは練習を始めることができずに終わってしまった。ぼくは何となくすっきりとしないまま帰宅した。

夕飯後、僕はＴＶをぼーっとながめていた。
（卒業式まで時間がないのに、どうするんだろう）と、明君の言葉を思い出していた。不安げな僕の様子に、「どうしたんだい」とおじいちゃんが心配そうに声をかけてきた。僕はその日、クラスで起こったことを話した。
するとおじいちゃんは、「そうか、そんなことがあったのか」と、じっと僕の顔をのぞきこんで「どんな合唱にしたいの」と続けて言った。
僕は、「感動的な合唱を歌って卒業式にしたいなあ。一生に一度だからね」と答えた。きっとみんなもそう思っているに違いない。
するとおじいちゃんは「感動、難しいね、感動って何だろう。どうしたらそれをかなえられるかな」とちょっと首をかしげた。僕はすぐには答えることができなかった。
「ああ、そういえば紀元前もの昔にね、中国に孔子という人がいて、ある日に聴いた音楽があまりにも素晴らしくて、感動し、３か月もの間、食事がのどを通らなかったというお話があるんだよ」と教えてくれた。
「へー、音楽のもつ力ってやっぱりすごいんだなあ」と僕は興奮して叫んだ。
「その孔子っていう人はそんなに音楽が好きだったの」と聞いてみた。おじいちゃんは、「うん、「楽は楽なり」っていう言葉があるよ。音楽は楽しいっていうことだよ。孔子が言うにはね、音楽には、みんなの心を一つに調和させる力があるというんだ。そうなったとき感動が生まれるのかもしれないね」と言った。
「みなで力を合わせてこそ、感動は生まれる」その言葉は僕の胸に突き刺さった。
と、突然そばで話を聞いていた姉が、「すごくいい話ね」と口をはさんできた。
「そういえば、この前、音楽の授業で先生が『旅立の日に』が生まれた時の話をしていたよ。

埼玉県にある中学校の校長先生が、「精一杯歌を歌えば心は健やかに成長する」っていう思いから、当時の先生たちと一緒に歌声の響く学校をつくったんだって。そしたらね、先輩の精一杯歌う姿にあこがれて、歌声は先輩から後輩へと受け継がれていったらしいよ。そしてね、それから３年後、１年生の時から、歌声の響く学校づくりをがんばってきた３年生にプレゼントとして、『旅立ちの日に』が先生方によって歌われたっていう話よ。卒業生の中には、辛いとき、苦しい時、立ち止まってこの歌を口ずさんで、前向きに歩き出す人もいたそうよ。まさに音楽のもつ力ね。感動が人生を支えるっていうか・・・」と、お姉ちゃんは一気に熱く語った。
（そうか。）僕は、おじいちゃんやお姉ちゃんの話から、とても大切なことがわかりかけた気がした。
（一生、心に残る歌が歌いたいな）純粋に僕はそう思った。そして、この思いを明君にも伝えたいと思った。僕はためらうことなく明君へ電話をかけた。

翌朝、明君がポンと肩をたたいてきた。「昨日はありがとう。心配かけたな。あれからいろんなことを考えたよ」と言った。
「いろいろって、どんなふうに考えたのさ」と尋ねると、
「本当の気持ちよさって何かってことさ」と照れ臭そうに言った。
朝の会で先生がみんなの気持ちを確認し、再スタートができるよう促してくれた。みんなも納得してやっと、練習を開始した。みんな必死だったが、生き生きとしていた。歌えば歌うほど心がはずんでくる。
そして、ついに卒業式の日がやってきた。みんなの心が一つになった歌声が体育館いっぱいに広がった。担任の先生もあふれる涙をこらえながら、満足げに拍手を送ってくれた。クラスがひとつになりみんなで創り上げた合唱は、小学校生活の勲章になった。
卒業式を終え、家に向かう道すがら、ぼくたちは何度も『旅立の日に』を口ずさんだ。別々の中学校へと進学する僕たちは、手を振り、別れを惜しみながら家路についた。

そして４月、新しい人生がスタートする。僕は『旅立の日に』をくちずさみながら、弾むような気持で中学校へと向かった。

以上が活用教材である。感動を通してのすがすがしい心情を想定し、そこに具体的なたとえを、祖父と姉を助言者として登場させている。「楽は楽なり」という言葉と、合唱曲「旅立の日に」の誕生エピソードは、子どもたちにとっても強烈なインパクトとして心に刻まれたことが授業での発言や、感想文から読み取ることができた。普遍的な音楽のもつ力を感じたものである。

（２）Ｄの視点における問題解決的な道徳学習の展開

『学習指導要領』では、問題解決的な道徳学習とは、児童が学習主題として何らかの問題を自覚し、その解決法についても主体的・能動的に取り組み、考えていくことにより学んでいく学習方法であると示されている。[13]児童一人一人が対象となるものの価値に触発され、あふれ出る感情が沸き上ってくる人間の感動体験の重要性をとらえることは極めて難しい。そこで、問題解決的な道徳学習の展開により、道徳的価値を追求する主人公の葛藤に自己を投影し、実際にどう行動すべきかを考えることを通して、児童が主体的・能動的に感動や畏敬の

念を自己の道徳上の課題としてとらえることを目指した。日頃、あえてその意義を考える機会の少ない児童にとって、感動や畏敬という道徳的価値の意義を見つめ直す機会を得ることができるのではないかと考える。開発教材に挿入された感動にまつわるエピソードの一つは孔子が「韶」という音楽を聴いた時に、あまりの素晴らしさに三か月も食べ物がのどを通らなかったという話であり、もう一つは、合唱曲「旅立の日に」の誕生についてである。どちらも魂が震えるほどの感動体験であることが想像できる。教材における道徳上の問題は、友人の感動という道徳的価値の重要性への認識の不十分さから生じている。その問題を解決するために、児童は主人公になりきり、感動の意義を友人に伝えていかなければならないという展開である。そのヒントは感動にまつわるエピソードにある。授業の指導過程は、①道徳上の問題を考える。②解決策を自主的に考察する。③各自の構想をもとに小グループで話合いを行うという展開である。各自で道徳上の問題を考えた後、少人数グループで話し合い、ホワイトボードに記録して全体で共有することで、「大切なことは何か」「どうすることが望ましいのか」ということに絞り込んだ授業を実践した。[14]今回の道徳の授業の後、児童は実際に音楽科の学習において卒業式に向けた合唱に取り組んでいく。道徳的な観念を実践と融合させるプロセスにおいて、より豊かな感性が育まれ、主体的に取り組もうとする意欲が生まれてくるものと考える。体験活動と連動した道徳的習慣の形成は、内側に向かう人間性の深まりや、外側に向かう創造性として強化されていくものである。そのような指導方法をもとにした指導案は以下のとおりである。

道徳科学習指導案

（1）主題名　　輝いて生きる　　D　感動、畏敬の念
関連価値　C　よりよい学校生活、集団生活の充実
（2）教材名　「旅立の日に」（自作開発教材）
（3）主題設定の理由
①ねらいや指導内容についての教師の捉え方
　人は素直に感動する心をもつことが大切である。その感動体験は生きるエネルギーとなり、より豊かな感性を育む。そしてその豊かな感性は生き方の何が素晴らしいのかを感じ取り、より善なるものを求めた創造的な生き方を育んでいくものである。科学技術が急速に進歩する昨今、奥深い自身の心を内観し、そこから湧き出でる生命のエネルギーを感じる感動を味わう機会は少なく、人間としての在り方を見つめ直すことは喫緊の課題である。ここでは、芸術作品に込められた「音楽のもつ力」や、他者と心を一つに合唱を創り上げ感動体験を共有することの素晴らしさに気付かせ、感動が人間の生き方にどのように関わっているかを考えさせたい。
②児童のこれまでの学習状況や実態と教師の願い
　児童はこれまでも音楽の授業や音楽集会を通して、みなで歌う喜びや、心が一つになり合奏した時の気持ち良さを感じた経験をもっている。こうしたすがすがしい思いを繰り返し体験していくことで、児童の心は育っていくものである。今後はさらに自分の中にある美しいものや気高いものを求める心に気付かせることが大切である。自分の感動を他の児童と共有させながら、想像する力や感じ取る力となる感性を豊かに育んでいきたい。
③使用する教材の特質やそれを生かす具体的な活用方法

この教材は感動がいかに人の生命や生きる力を支えるものであるかを考えさせるものである。音楽を学問の最終段階と考えていた孔子の「楽は楽なり」の言葉を教材に盛り込み、音楽がいかに人間の内面的な道徳性にまで働きかけるのかということを考えさせながら、合唱曲「旅立の日に」にまつわるエピソードを通して、感動体験が深く人の心に深く刻まれ、その後の人生を支えていることを明白な事実として実感できるものであるとして取り上げた。孔子は、斉国に滞在していた時に聴いた古代の帝王舜がつくったといわれる「韶」という音楽があまりにも素晴らしく、３か月間食べ物がのどを通らないほど感動したとされている。また自らも音楽を好み、片時も琴を手放さず親しんでいたという。「楽」を学問の最終段階と考えていた。孔子は、音楽がいかに人間の内面的な道徳性にまで働きかけるのかというところまで深い洞察力をもち、その意味を明らかにした人である。

また、合唱曲「旅立の日に」にまつわるエピソードは、感動体験が深く人の心に深く刻まれ、その後の人生を支えていることを明白な事実として実感できるものである。授業で取り上げた合唱曲「旅立の日に」は、全国の中学校の卒業式において、合唱曲「大地讃頌」と並び、多くの中学校で歌われている合唱曲である。最近では、小学校の卒業式でも歌われるようになった。楽曲は 1988（昭和 63）年、埼玉県にある秩父市立影森中学校で生まれた。校長の小嶋登先生は、「精一杯歌を歌えば心は健やかに成長する」という信念をもち、歌声の響く学校づくりに踏み出した。当時の音楽科の高橋（旧姓坂本）浩美先生は、校長のリーダーシップのもと、他の先生方と心を一つにし、全校をあげて合唱に取り組んでいった。それから３年後、１年生の時から、歌声の響く学校づくりを一緒にがんばってきた３年生たちへのプレゼントとして合唱曲「旅立ちの日に」は先生方によって歌われた。校長の小嶋先生が作詞し、音楽科の坂本先生が作曲したものである。卒業生には、卒業アルバムとともに、その楽曲の楽譜が贈られた。この２つの話を通して、人間の中には感動を求める美しい心があることに気付かせ、それに向かってどのような生き方がのぞましいのかを考えさせる教材である。卒業を間近に控える６年生には、すがすがしい思いをもち、胸を張って巣立ってほしいと願うものである。終末では、中学校版での混声三部合唱を聴き、新たな中学校生活に向け、希望をもって進んでいこうとする心情を育てたい。

（４）音楽活用との関連

展開と終末部分で活用する合唱曲「旅立の日に」は、教育芸術社「小学校の音楽６」の音楽科教科書に掲載されている音楽科教材である。

（５）学習指導過程

ねらい

感動を通した本当の気持ち良さに気付いていく明君の変容を考えることを通して、人間としての在り方を見つめ直し、美しいものや気高いものに素直に感動するすがすがしい心情を養う。

	児童の学習活動	主な発問と 予想される児童の反応	○指導上の留意点 ★評価
導入	○感動についてこれまでの体験を想起する。	○これまで、どんな時に感動したか。 ・大自然の素晴らしさに触れた時 ・心一つに試合を応援した時　　等	・道徳的価値への方向付けを図る。
展	○条件・情況を知る。	○ここでは何が問題になっているのだろう。	・道徳上の問題をし

開 前 段	○『旅立の日に』の一番だけを聴く。 ○読み聞かせを聞く。 ○発問について考える。 ○ペアになり、相互に電話をかけあう。 ○グループで紹介しあう。 ○全体に紹介する。	・自分の好きなパートを歌おうとしている。 ・合唱は一人ではできないことに気付いていないこと。 ・本当の気持ちの良さとは何かに気付いていないこと。 ○主人公は、おじいちゃんやお姉ちゃんの言葉からどんなことがわかりかけてきたのだろう。 （補）おじいさんやお姉さんが主人公に伝えたかった事はどんなことだろう。 ・感動がどれだけ人に力を与えるか。 ・音楽のもつ力や素晴らしさ。 ・心の底から歌い上げることが大切 ○あなたが主人公なら、明君に電話でどんなことを伝えるか。 ・合唱は一人では完成しない。 ・みんなで心を一つにすることで感動が生まれる。 ◎明君が気付いた「本当の気持ち良さ」とはどんなことを意味するのだろう。 ・みなで歌うことの喜び ・自分の役割のパートをしっかり歌いきることで素晴らしい合唱が生まれる。	っかりとおさえるようにする。 ・単に好きなパートを選ぶことがずるいということではなく、深い視点からみなで合唱することの意義を自分事として考えるようにする。 ・ペアの相手の話に感じたことをグループで発表し合い、共有する。 ・グループごとにホワイトボードにまとめ黒板に掲示する。
展 開 後 段	○道徳ノートに書く。	○感動とは、人間にとってどのような存在なのだろう。 ・命をささえるもの。 ・生きるエネルギー。	★明君の変容から、どのような姿勢から感動が生まれるかを捉えることができたか。【発言】
終 末	○「旅立の日に」を聴く。 ○教師の説話を聞く。		・混声三部合唱「旅立の日に」を聴かせ、中学校へとつないでいく。

（6）児童の実態と変容

① 授業前のアンケート結果

授業を行う以前、授業実践を行う小学生６年生 36 名へアンケートを行った。

ア　生活の中で素晴らしいものに触れ、感動したことがあるかという質問に対し、「ある」と答えた児童は 34 名、「ない」と答えた児童は２名であった。12 年間ほど生きた中でも、感動を味わったことのある児童の割合は比較的多い。その内訳は、①自然の素晴らしさ 14 名②自然の厳しさ３名③素晴らしい音楽７名④素晴らしい絵画２名⑤いとおしい命５名⑥人間の行為の素晴らしさ５名、と多岐にわたるが、音楽の感動体験は、20%にとどまる。

イ「音楽は好きか」という質問には、「好き」が 31 名「好きではない」が５名

「音楽に感動を覚えたことがあるか」という質問には、「ある」が 31 名「ない」が５名
音楽に感動を覚えたことがある児童のうち、「よい音楽を聴いた時」が 22 名であり、合唱や合奏を通した感動体験は９名とわずかであった。

② 授業観察の視点

授業では、音楽を通して味わう感動体験が、いかに人間にとって大切なものであるかということを児童の発言や記述から捉えることができた。展開後段の主な発問についての授業では、

〇感動とは人間にとってどのような存在なのだろう。

・みんなで協力して素晴らしい合唱を創り上げた時の達成感やすがすがしさは、その後の自分を支えてくれる。

・「楽は楽なり」というように、みんなで力を合わせて心を一つに調和させ生き生きと歌い、幸福感を分かち合ってこそ、感動が生まれる。感動はみなを幸福にするものである。

・全員の力を合わせた歌声から感動は生まれる。感動の共有から人と人の絆が生まれる。

・感動を通して前向きになりたい。感動とは心のこもったもの。

と、児童全員の記述には「感動」のもつ意義や人生における価値が捉えられていた。

③授業後のアンケート結果

授業前には、「良い音楽を聴いた時」に音楽に感動を覚えた 22 名の児童や、音楽に感動を覚えた経験がなく、音楽を好まない５名の児童全てを含め、授業後大きな変容を記述から捉えることができた。音楽を聴くだけにとどまっていた児童が、能動的に歌おうとする姿勢をもち、音楽を好んでいなかった児童は、「音楽は昔から人の心を癒してきたんだなあと感心した」と、音楽のもつ力をあらためて見つめ直す機会となった。授業後の感想では、全員が、心を一つに自ら合唱を創り上げる意欲を強く表明し、感動の共有化を目指そうとしていた。

５　まとめ

道徳科の授業において、感動、畏敬に関する道徳的価値を、音楽と道徳教育を関連させて取り組んだ結果、その有効性が実感できた。授業では児童たちは、これまでの自身の体験と重ね合わせながら、主人公の葛藤や道徳上の課題に主体的・協働的にのぞんでいた。授業後の児童の感想には、「旅立の日に」を歌いたくなったという湧き上がる思いが多くみられた。道徳科の授業での学びが、音楽科における学習活動へと結びつき、発展させていく手ごたえを感じた。

また、問題解決的な道徳学習による主体的・対話的な学びを通して、考えざるを得ない切実な道徳的課題と向き合うことにより、比較的授業では扱いにくい道徳的価値においても、深い学びを展開できたと考える。問題解決的な道徳学習は、道徳上の問題を明確にして向き合うことに特徴がある。感動という認識しづらい漠然とした対象に、明確な道徳上の問題が設定されたことで、児童たちはより自分の課題として考えやすかったのではないかと考える。

感想では、「音楽には人の心を動かす力がある。感動とは何かということについてあらためて考えた。感動は人の心を動かし、すがすがしさは私たちの生活をよくしてくれる」と、感動そのものの意義や価値についての考察が多くみられた。このように、道徳科と音楽科との関連を図る取組は相乗的に作用し、児童は学ぶ意義を実感をもって認識したものと考える。今後も道徳科の授業と音楽科との関連を図り、感性を働かせながら対象となる価値の判断や関わりを創造的に捉え、よりよい人生を切り拓く素地を育成する感知融合の授業の構築に取り組んでいきたい。

【注】

1　読売新聞「想う・語る」(2019. 4. 27)
2　竹内照夫『「礼記（中)」新釈漢文大系 28』明治書院（1977）p. 580
3　文部科学省『小学校学習指導要領解説　音楽編』(2018)p. 123
4　諸富祥彦『人知を超えたものへの「畏敬の念」の道徳授業』(2007）p. 8
5　文部科学省『中学校学習指導要領　特別の教科　道徳編』p. 67
6　文部科学省『学習指導要領解説　総則編』(2018)p. 24
7　文部科学省『中学校学習指導要領解説　音楽編』(2018)p. 16
8　供田武嘉津『音楽教育学』音楽之友社（1957）p. 48
9　文部科学省『小学校学習指導要領解説　音楽編』(2018)p. 122
10　文部科学省『同』(2018)p. 123
11　文部科学省『小学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編』(2018)p. 69
12　文部科学省『小学校学習指導要領解説　音楽編』(2018)p. 123
13　文部科学省『中学校学習指導要領　特別の教科　道徳編』p. 96
14　石黒真愁子「道徳教育と音楽教育の関連を図った道徳性の育成」(麗澤大学大学院修士論文（2021）p. 131-135